



俚諺に關する覺書

陳

紹

馨

本島人の會話を注意して聞くと、實に多くの俚諺が使用されてゐることに氣付かれるであらう。俚諺を一つさしあげてみると、會話は著しく生氣を帶びて來、色々説明をならべたあげく俚諺を一つ引用すれば、相手は「のみこめました」といふ風になづく。これは相當興味深い事實である。

理性的動物とこそ稱せられてゐるが、人間が自分の生活について因果的な法則關係を抽象し得るのは、極く限られたものにすぎず、大部分のものに於て、傳承的な社

會慣行や準則に依據して生活するのが常である。未開人においてこの社會慣行や準則は具體的形態を呈し、殊に好んで擬人化されるのである。神話、傳説、說話、民謡、寓話、言慣し、歌謡、諺歌、謎々、俚諺等が如何に未開人の精神内容を構成し、その日常生活を支配してゐるかは、我等の想像以上である。未開人にとって俚諺を最も多數知つてゐる者は、事務を最も正しく裁断し得る權威者なのである。「慎重を要すべき生活上の行爲の多くの問題、即ち職場、利益、仕事一般、日下日上及び一般に異なる階級のものとの交渉、支配者に對する態度等の問題に於ては、俚諺は幾世代も驗證された處の種族の智慧の結晶である。それはない生活が爲した處の社會生活の秩序體系とも稱すべきもので、或る新しい事象が發生した場合に、

「謹慎に價する處である。」「慎重である、勤勉と用心深くあれ、惡事をなすな、困苦の者を助けよ、泣いてゐる者と共に泣け、死者の遺言を尊べ等が、俚諺に示されてゐる教訓である。日常生活において俚諺は非常に好んで使用され、そして異邦人がたまたま一の引用でもすれば、モヴァンダ人は、初めの言葉を聞いただけですかり有頂天になつて後の言葉をつとけてくれる」(サムナア・ケラア)。

俚諺は幾世代も驗證された處の種族の智慧の結晶である。それはない生活が爲した處の社會生活の秩序體系とも稱すべきもので、或る新しい事象が發生した場合に、

2

未開人の間において、未分化状態で原形の一部をなしてゐた俚語は、人間生活の進歩と共に漸次分化独立するに至つた。それと共に漸次当初における有力な社會結構的意義を失ふに至つたが、併し尙文字なき民族或ひは民度の低いものの智慧として重要な意義を有するものである。

1

果を大ならしめる爲に説教法を用ひることもある。元來一個人の發奮したものであるが、その立言が適切にして大衆の語はんとして謂ひ得なかつたことを道破したものである爲に、作者を離れて萬人に妥當する共有の文化財となつたものである。

仲説は文字なき民の智慧として、有體實驗の間で蔑視されたこととあつた。稱し仰説の内には人生の機微真質を道破し、或ひは剝切なる教訓をたれた珠玉の如きものがあり、現代人にとっても看過出来ないものである。只元來が庶民の智慧である爲に、弱い庶民の生活を反映して、日常生活の準則を示すに止まり、或ひは往々にして個人的な處世訓や修身訓に墜して、勇往進氣の氣風高潔な理想に缺けてゐることは格言金言と異る處であり、自ら仲説の限界も看過してならないものである。

現代人にとって、俚諺が民俗研究の好題の資料であるのは謂ふ迄もない處である。數多い民俗學の對象の内、俚諺はその意義が平明である點において、比較的容易に傳承文化の意味關聯に近よらしめることの出

來るものである。假説を集積することによつて、一地方又は一社會の特徴を明かにすることが出来、又他地方他社會の假説と比較することによつて、變轉極りない人間生活における統一的な人間性を見きはめることが出来るのである。重要な假説の變遷、或ひは同一假説の變化の跡を追れば、自ら民俗變轉の跡も明かになるのである。

民俗學的資料は現在ではかなりよく集められてゐるが、然し組織的研究とその社會的關聯の考察が缺けてゐる、と識者が指摘してゐるが、正にこの點において假説はみのり多き世界を約束されてゐる。假説の組織的研究は、單に傳承文化の社會的關聯を開明するのみでなく、更に進んで社會生活の體系的な考察の一つの適切な試みをなすものである。

理論的考察において先づ出發點となるべき所與 (Domestic) を確立しなければならない。この所與は、その上に構成される理論の當否を決するものであつて、その妥當なる確立の重要なことは論を待つ迄もない處である。例へば社會心理學者は所與として、諸種の社會本能を指摘してゐるが、

論書によつてその確立する本能が異つて、互に論難してゐるのは、所與の確立に妥當を缺くものがある爲である。處である社會に行はれてゐる傳説を、その社會に關する理論的考察の所與として見ることが出来る。例へば「妻不如妾、妾不如婢、婢不如僕」、「美花在人的體、美葉在人的房」、「家花不如野花香」、或ひは *Verbotene Freue* (*schmucken am besten*) 等の傳説によつて人間には求めがたきものを殊に好んで求める傾向のあることを確立し、「外來的和尙會意經」、「近廟欺神」、「豫言者は故郷では尊ばれず」等の傳説によつて、人間に敬遠心 (Distance worship) のあることを確立し、又「惜花連枝愛」、「怡他憎九族」等の傳説によつて、人間にはその好惡的情を誇大擴張する傾向のあることを確立するなら、理論的考察の出發點として適當なものであると思ふ。レオボルト・フォン・ヴィゼは日常用語の内の社會關係を表現する言葉を分類整序することによつて、その關係社會學の體系を構成したのであるが、社會生活に関する傳説を分類整序したら、更に一層興味深く生氣ある體系となる筈である。

ある。傳説社會學は蓋し魅惑的なテーマである。

四

傳説を扱ふに當つて、著しく我等の注意を引く問題が一つある。即ち相反對する傳説の存することである。一方において「人を見れば泥坊と思へ」と謂ふかと思へば、他方「渡り行く世には鬼はある」と謂ふ。「知子莫若父」が眞實であれば「人莫知其子之惡」も又眞實である。せいては事を仕損する」、「早いが勝」、「落魄的鳳凰不如鶴」、「沒死的駱駝比馬大」、「爲人不當頭、爲人不當袖」、「爲官須作相、及早必爭元」、「善惡到頭終有報、只爭來早與來遲」、「修橋造路双眠眼、殺人放火命更長」等々。

この二律背反は如何に解すべきであらうか。オーギュスト・コントは社會生活を研究したあげく、「總ては相對的である。そしてこれらののみが唯一の絶対的な原理である」と斷定した。認識論上の命題としてはどもかく、社會生活に関する限り我等は之を承認せざるを得ない。傳説における二律背反はこのことを反映したものであることを知

らう。

我等は併し更に一步進むべきであらう。二律背反が如何に辯證法に發展するかは哲學者に任せることにして、我等は社會生活において二律背反が辯證法に發展し得るのを認識しなければならない。このことは傳説にも反映されてゐる「遂ふは別れの始」、「覺むるは覺るの基」、「人を使ふは使はるゝ」、「貰けるが勝」「貴的不貴、賤的不賤」等。(一) ゲルによれば辯證法は自然及精神の世界の總ゆる個々の領域や形態の中で有力に働いてゐるのであるが、彼は精神界における辯證法の一例として傳説をあげてゐるのである。即ち、日常經驗に従してある狀態若くはある行爲の極端がそれの眞反對に變ることは、例へば「法もすぐれば不法を招く」、「假るもの久しからず」、「銳さも過ぐれば刃が缺ける」の如き傳説を見てても明かである(エンチクリベディ)。全然相反對する傳説が存るのは我等を困惑させるものではなく、かへつて傳説が人間生活を如實に反映したものであることを知らせるものである。